

成人向け



朽木さんと黒崎くん。

朽木さん

と

黒崎くん。

「けふつ……私のおしゃれメガネがベトベトになつたではないか……たわけ……」

「ワ……ワリイ……つい……」



「すげえよルキア、やっぱこう

丸見えじゃなくちやな。」

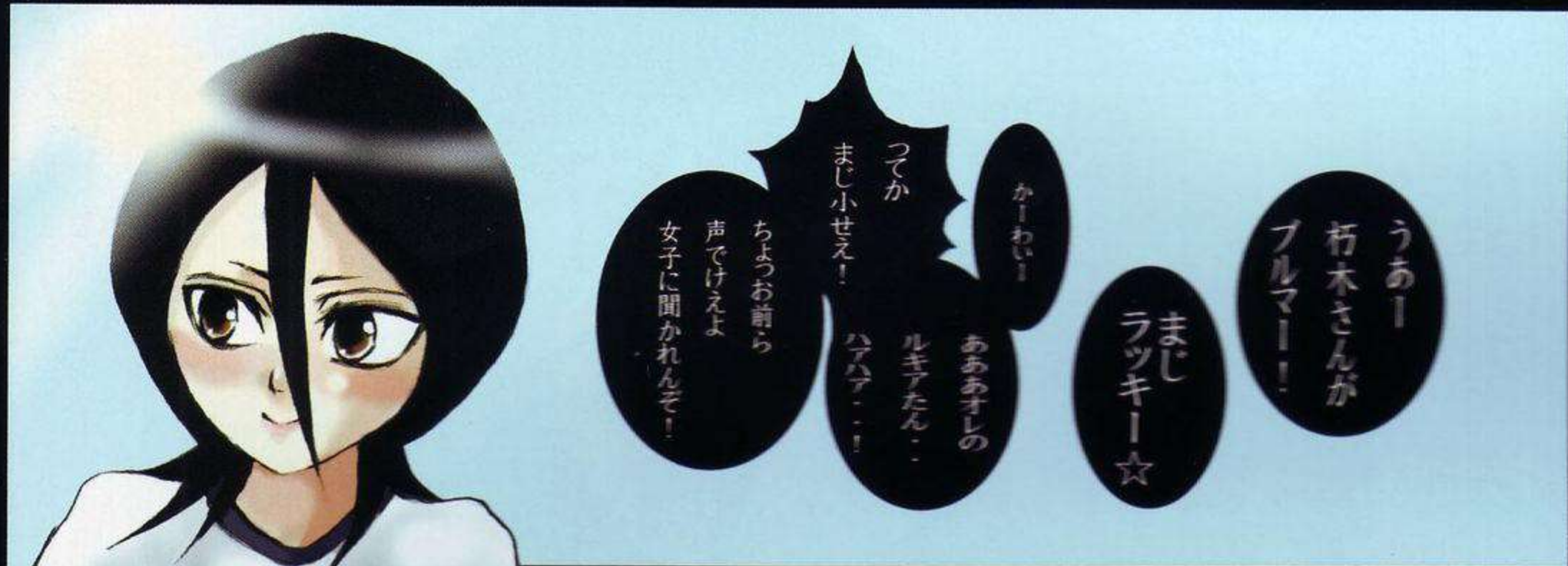
「あう・・・脱ぐのは駄目だと言ったろう！

誰か来たらどうするのだ・・・」

「じゃーとっとと済ませようぜ」

「あ・・・ああ！」







なー皆して
告ってみねえ？

数打ちや当たる
方式！

誰かが付き合えたら
皆にまわす約束で！
独り占めは無し！

オイオイ！
まわすってどういう
意味だよ（笑）



・黒崎くんの事は、
ちよつぴり羨ましいかな・



朽木さん？
可愛いと思うよ

んーでも
別にボクは
付き合いたいと迄は
思わないけど・

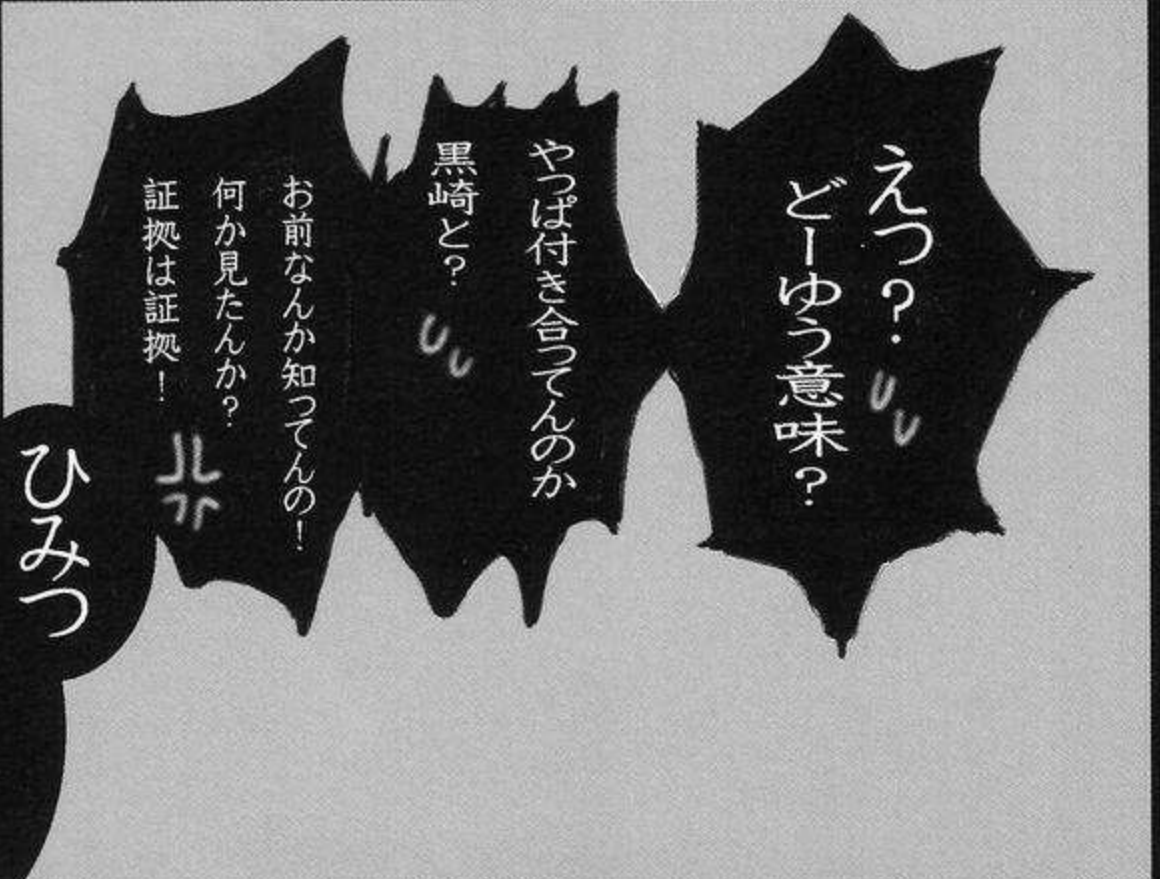


お前はああいうのは
タイプじゃないっけ？



ボクは
何もかも知ってる・

・・・そう



えっ？・・・
どーゆう意味？

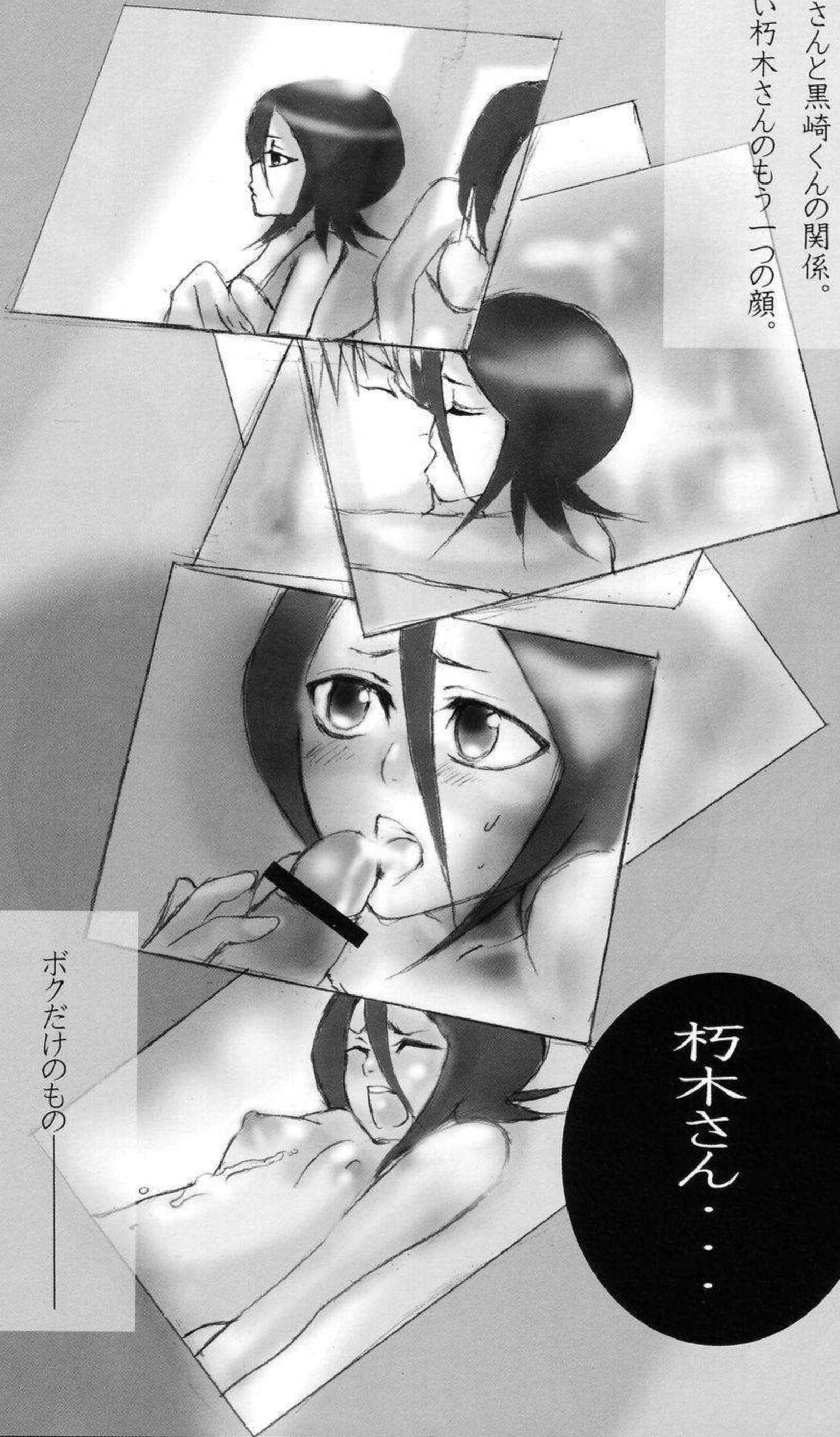
やっぱり付き合ってるのか
黒崎と？

お前なんか知ってるの！
何か見たんか？
証拠は証拠！

ひみつ

ひみつ

朽木さんと黒崎くんの関係。
愛しい朽木さんのもう一つの顔。



ボクだけのもの

朽木さん……

ホウ 黒崎さんと 崎くん。




「……も、もういいだろう、いつかお前は
 そんなに助平になつたのだ。」
 「……だーめた、もつと指で抜けて見せてみるよ。
 ……へえ、こんな明るい所で見るとあれだな、
 お前本当に一本も毛生えてないのな。」
 「なっ……！」
 「……やらしーな、お前」
 「きつ、貴様に言われたくないわ……」
 「……オレ、お前も、お前の……せ、
 すげー、好きだぜ……」
 「……な……何を言つてゐるのだ……」

二人は校舎内で人の居ない場所や、
 施設のできる教室を知り尽くしている。
 学校でセックスをする事に溺れている。
 そしてそれはボクも同様である。
 観察・記録する側、として。



自ら舌を絡めながら、
朽木さんは黒崎くんのズボンに小さな手を這わせ、
硬くなつたモノを探りあてると、
いとおしそつにゆつくりと撫でる。
口付けの最中だというのに、
その瞳は開いたままで、
おあずけをくらつたペットの様に、
物欲しげな眼差しを向けていた。





黒崎くんの唇と舌先が淫らに朽木さんを愛撫する。
「あああつ……あ……いち……ご……」
朽木さんは身体を強張らせ乍ら、
両手で自らの股間をギュウと抑えた。
クリトリスをいじりたくてたまらないのだろう。

黒崎くんの手の平にすっぽりと収まってしまおう程の
小ぶりの胸。
しかし、なんだ、意外なあのボリュームは。
指先で触れられただけで、
朽木さんの真つ白いおっぱいの肉は、
そこだけ別の生き物の様にふにゅふにゅと揺れる。
その頂には、つやつやとした薄ピンク色の乳首が
いやらしく腫れあがっている。
黒崎くんが、夢中になるのも無理はない、
と思う。

黒崎くんの、限界まで膨張したそれを、
朽木さんが小さな口で愛撫する。
全て口に含む事はできない代わりに、
丹念に亀頭を舐め廻し吸い上げ、
唾液とカウパーを混じらせながら
手で優しくしごきあげる。
緩急をつけ、黒崎くんの反応を味わい乍ら…





「うっ…ルキア…」
 「…いちご…ひもちいい…か？」
 「あ…ああ…すげえ…イイ…」



「ウツ！ルキアッ！でる…ぞ！」
 ビュルツビュルツ…
 朽木さんの喉奥めがけて真っ白い精液が飛び散る。
 「んあつ…いひご…すげい…濃いつ…」
 ♡



「ルキア……ワリイ沢山出ちまつたな
ペーしてもいざぞ……」
「ん……う……らいじよぶだ……この位……」



朽木さんは手のひらに受けた精液をジュルジュルと飲み干した。
最後の一滴まで、いとおしげに舐めとる。
……朽木さん、幼く愛らしい顔をして、
そんな事をするなんて……。



カーテンの隙間から差し込む強い陽光に晒されて、
愛液にまみれた朽木さんのクリトリスがぬらぬらと光っている。
黒崎くんが、その風貌に似合わせ程に
意地悪げな笑みを湛えながら、陰茎をゆつくりと抜き差しする。

「ルキア、自分でここ、さわれよ……」

朽木さんは可愛らしい困った顔をしながらもそれに応じる。
白い指先で円を描くようにクリトリスを撫でると、
途端に甘い声で鳴き始める。

「……あ……あは……ああ……だめ……こんなやつ……
すぐ達してしまう……のだつ……」

黒崎くんは、朽木さんが蕩ける様な表情になった瞬間に、
パンパンに太くなった陰茎を最奥までねじこんでやる。

「ああああー！」

その一突きで、朽木さんはいつも達してしまうのだ。

「あっ・・・一護・・・お・・・く・・・」

「・・・奥？」

「んんっ・・・せんぶ・・・はいるの・・・」

「キモキモイッ・・・」

「奥まで・・・こっから・・・キモキモイッのが？」

「ああ・・・！一護・・・もつと・・・」

「もつと・・・突いて・・・くれっ・・・！」





「はああつ・・・あつ！一護お・・・！」
黒崎くんはいとも軽々と朽木さんを抱えあげ、蹂躪する。
それはまるで小さな雌猫との交尾の様で、
観ているととても倒錯的な気分になる。
融合した二人の身体が激しくリズムを刻んで、
肌から汗が、露わな結合部からいやらしい体液が、
ぽたぽたと床を汚していく・・・。



「ルキアッ……！なかに出すぞっ……あ……う！」
「一護っ……！」

ビュルルツ、ビュル、どくん、どくん……

黒崎くんの精液は濃く量が多くて、

朽木さんはたっぷり時間をかけて膣内に射精されて、

それを飲みこもうと膣内が収縮するのだろうか、

朽木さんはいつも全身を痙攣させながらイッてしまう。



黒崎くんが勢いよく陰茎を引き抜くと、

引き抜く際の強烈な締め付けが最後の射精を催し、

それは勢い良く弧を描いて朽木さんの胸まで飛んだ。

そして、朽木さんの真ピンクに充血した性器から、

大量の精液がとろとろと溢れ出し、

二人は事後の放心に暫し酔いしれるのだ……

こんにちはー GATARI です。
またもや、奇妙な本になって
しまいました。

自分史上最短の作業日数で、
色々と恐ろしいですが、
一度こんな感じのイラスト+文章本
作ってみたかったので、
楽しかったです。

今夏はけっこうな数のカラー絵を描いたなあ。
これからも沢山描いて早く上達したいです。
それではまたお会いしましょう。

2006年夏 GATARI



朽木さんと黒崎くん。

発行日；2006年8月12日

発行元；SUCK DROP BAMBIES

発行人；GATARI

E-mail；sdb_gatari@yahoo.co.jp

18才未満の購読を禁じます。

無断転載・複製を禁じます。

朽黒

木さんと

崎くん。



**SUCK
DROP
BAMBIES**